ても、仏教史上注目すべき人物には帰化人が多い」と述べているのは当然のことである。

奈良時代の医療を代表する人に鑑真があげられる。彼の来日後の仕事は『続日本記』によれば、一つは経論の校正、二は薬物の可否真偽の判別を鼻でかぎわける、三は皇太后（元正）の病気を治したことであった。彼は失明しており、弟子たちの間には複雑な反目と軋轢とがあり、僧侶社会で、競争暗闘などのために彼の治療の恩恵に浴した人はそんなに多くなかったと推察される。ついで正倉院の薬物について検討しよう。土肥慶蔵氏によれば「中国での薬物の内服の主目的は長生と性欲の保存にあって、疾病の治療はそれほど重視されなかった」と述べ、清水藤太郎氏は、正倉院薬物を古方薬品、東南アジアに産する薬物などに分類し、現在でも貴重な漢薬とされているものがあると述べている。これらをまとめると正倉院薬物の過半数は栄養剤、精力剤であることがわかる。（杉山二郎氏）。

皇室関係者の治療を『続日本紀』について検討すると、ほとんどは天下に大赦し、天下に放生を行い、僧尼の得度を行っている。さらに写経、転経、仏像の製作を行うという方法をとっている。百方療治または湯薬を用うと記載されているのは数人に過ぎない。

以上のことをまとめると、医療にくわしかったのは中国または朝鮮渡来の僧侶であったが、多くの病気には期待すべき効果が得られなかったので、上流社会においても加持祈禱、写経、などが重視された。したがって、一般国民はさらに低級な呪術に頼ったのは当然であった。

（平成元年三月例会）

明治初期静岡県の病理解剖について

土屋　重朗

明治十五年より明治二十二年まで、静岡函右新聞と静岡大務新聞の両地方紙にときどき連載された「病体解剖記事」は、両紙共載のものを一件とみなしても合計八件に及んでいる。

内容は大へん詳しいものが多く、おそらく解剖実施者が書いた報告書を、新聞記者が何らかの方法で入手して新聞にそのまま発表したと思われる。正確で詳しく、医師でなければ書けない内容であるからである。

静岡県の解剖は、明治十三年と十四年に静岡と浜松で各一例ずつ刑死した者を一般系統解剖として一般医師に供覧しているので、これらを含めると二十二年までの被剖検者は十名に及んでいる。

病理解剖が、わが国ではじめて行われたのは「東京大学医学部百年史」によると、明治六年二月とあり、同部では明治十年より病理総論、同十二年より病理学各論が講じられ、十六年には病理学総論および病理解剖が独立した科目となったという。

したがって静岡県における病理解剖は医学校もなく、病院だけで行われた事を考えると、その実施は極めて早期で症例も多い。解剖執刀指揮者は東京大学医学部またはその前身者が多い。

明治二十二年をすぎると、病理解剖の新聞記事はほとんど見当

らない。これは病理解剖が一般にとって、さほど珍しいものでなくなった事、他に新聞記事の材料が多くなったこと等に起因すると思われる。

医学関係の見学者が多いのもこの時期の特徴で、少なくとも十名内外、時には三十名を超えている。見学者は開業医が多い。

病理解剖全八例を日時、執刀者、助手、立会人、見学者、剖検所見、被剖検者名および職業、年令、解剖動機等を一覧表にして、各例について説明を加えた。

病名は結核四、肝臓病二、梅毒一、その他一で顕微鏡検査を行ったのは一例にすぎないが、当時の医師たちの熱気が身近に感じられる。

（平成元年三月例会）

紹　介

谷口克著『**免疫の闘い**』

我々の体は、生体活動を停止すれば数時間のうちに腐敗が進行し異臭を放つようになる。生命活動を効率よくすればするほど、我々の体はどの微生物にとっても魅力的な培地になってしまう。生きていることの証が感染防御である。ひとたび侵入した微生物に対していかに効果的に対応するかという明確な目的を持って、免疫系のネットワークは成立している。たんにエネルギーの高い標的細胞傷害性を有してもその制御が乱れてしまえば、とくに自己組織に対して取り返しのつかない傷害を与えてしまうパラドキシカルな現象も起きてしまう。

消化、吸収、異化と並んで、免疫現象とは古代人が小宇宙にたとえた我々の生体の存在を支える重要な柱である。本書『免疫の闘い』はこのような視点から、最近とくに一般の人々の間で関心の高まりつつある、癌、エイズ・ウイルスと免疫現象の関わりを、やさしく極力専門用語を使わずに解説してくれている。

免疫現象によって我々の生命は支えられていても、その対象となるウイルスや細菌、ましてやそれらに対する抗体を目にすることはできない。そのため、つい机上の空論・書生談風になってしまう免疫現象を、エイズや癌といった身近に迫りつつある事例に合わせ、ここ二〇年間の莫大なこの分野の進歩を取り入れ解説している。常に免疫学の第一線にいる著者であってこそはじめて可能な著作といえよう。

免疫学と他の生物学との決定的な違いは、免疫学が治療学として出発し学として確立された後にも疾患の治療を目指していることであろう。本書の題にある闘いはこれを意味する。免疫現象はジェンナーやパスツールによってその現象としての解析を待たずして治療に応用され実績をあげ、その後、北里、ベーリングらによって血清学としての基礎が少しずつ形作られていったものである。この間の事情も本書にわかり易く解説されている。

またエイズなどのウイルス感染病が社会問題化するにつれ、いままで一般の人々には聞きなれないT細胞、B細胞、マクロファージ、抗体などという本来専門用語であるべき術語までが一般の